

新型コロナウイルス感染症対策 専門家会議（第2回）
議事概要

1 日時

令和2年2月19日（水）19時17分～21時26分

2 場所

5号館6階共用第7会議室

3 出席者

座長	脇田 隆字	国立感染症研究所所長
副座長	尾身 茂	独立行政法人地域医療機能推進機構理事長
構成員	岡部 信彦	川崎市健康安全研究所所長
	押谷 仁	東北大学大学院医学系研究科微生物分野教授
	釜范 敏	公益社団法人日本医師会常任理事
	川名 明彦	防衛医科大学内科学講座（感染症・呼吸器）教授
	鈴木 基	国立感染症研究所感染症疫学センター長
	中山 ひとみ	霞ヶ関総合法律事務所弁護士
	武藤 香織	東京大学医科学研究所公共政策研究分野教授
	吉田 正樹	東京慈恵会医科大学感染症制御科教授

座長が出席を求める関係者

大曲 貴夫	国立国際医療研究センター病院	国際感染症センター長
西浦 博	北海道大学大学院	教授
和田 耕治	国際医療福祉大学	教授

4 議事概要

<加藤厚生労働大臣ご挨拶>

2月16日の第1回会議に続きまして、また今日、しかも、こうした時間帯にお声がけをいたしましたところ、こうして皆さんにお集まりいただきまして、改めて御礼申し上げます。

今回、今日の会議では前回の会議を踏まえまして、一つは総理からも御指示がありましたけれども、大規模集会に対する対応をどうするのか、総理から専門家の皆さんの声を聴いて決めていくようにということでございました。

それから、もう一つは、今日から下船がスタートしておりますけれども、ダイヤモンド・プリンセスにおけるこれまでのデータを分析していただきたいというように思います。

また、今日は現場をよく知っておられるということで大曲先生に加えて国際医療福祉大学の和田先生、また、北海道大学の西浦先生にもこうして御参加をいただいてお

りますけれども、特に和田先生にはダイヤモンド・プリンセス号にも対応いただきまして、そうした状況について御報告をいただければというように思っております。

また、先般、これからの感染が増大することを想定して対応を考えていくべきだという認識をお示しいただきました。まさにそうした状況の中で新型インフルエンザには行動計画というのがございますけれども、それに準ずる形でどういった対策を考えていくのかということをしかりと固めていく段階に来ているのだと思いますので、この点も含めて先生方の御所見を賜ればありがたいというように思っております。

大変遅い時間ではありますけれども、どうか先生方の忌憚のない御意見をよろしくお願い申し上げます。

<国内の発生状況等>

- 各地方自治体の相談センターの情報や接触者・帰国者外来を通じた検体の採取状況について、国が情報を一元管理できるような体制が必要である。
- 国内の状況としては、既に感染早期という初期の段階ではなく、拡大感染期に入ったという認識である。ただ、地域ごとに状況の差があるので、地域によった評価をして対応を決めるべきである。
- 中国での感染者の発生が落ち着いてきているという蓋然性は高い。この1週間あたりこの状況では、日本国内で封じ込められる可能性もあると科学者の間では認識されている。
- ただ、封じ込めるためには、クラスターを追いかけるキャパシティであることが前提となる。
- 特に関東近辺の病院は、多数の患者を抱えており、感染管理に関する情報を求めている。診療のガイドライン等を準備していきたい。

<大規模なイベント等の開催>

- 国として開催すべきでないイベントに関して明確な基準を示すことは困難であるものの、一般の企業や大学等の組織としては、大まかに判断をするための参考となる基準は示して欲しいはずである。どういう場合に控えてもらうか、ある程度基本的な考えを述べた方がよい。
- 基本的な考え方として、ある程度のエビデンスとして存在するのは、人と人がフェイス・トゥ・フェイスの状態にあるクルーズ船や屋形船でのリスクが高いということ。
- これを踏まえた上で、クリティカル（重要）なもの以外の不要不急なイベントであれば延期等を考えてもらう方がよい。また、クリティカルなものを行う場合も ICT を活用した遠隔会議等の実施を促すことが適当である。
- 日本国内において、現時点では大規模なイベントで感染が拡大したという事例はないものの、民間の大規模イベントが中止になっている。国民の視点ではどこにリスクがあるのかに惑わされている状態である。
- 国民の皆さんが一度感染すれば死に迫る病気だという印象を持ち始めているような状態なので、日本政府としてウイルスのシビアリティ（重大性）がどれくらいだということを示すべきではないか。

- 大規模なイベントのみならず、小さなミーティングや幼稚園の遠足まで中止になっているという状態なので、これは何とかしなければならない。
- リスク評価をしなければ感染がどれほど広がっているかについて把握できない。地域によっては患者が発生していないところもあるので、地域によって対応を変えられるような配慮が必要である。
- リスクが高いのは大規模なイベントではなく、密閉状態のフェイス・トゥ・フェイスの10人~20人規模の集会のようなソーシャルギャザリングである。近くに行って長くいることが問題の本質である。
- 大規模なイベント開催の自粛要請がメッセージではなく、何が危ないかを伝えるべきである。
- クラスターの発生を抑制していくことが最も重要である。また、風邪のような症状のある方には外出を控えていただくということも強めに発信するべきである。感染したかもしれない人が他の人へ移さないことはできる。
- 多少の風邪なら当然に出勤するというような従来の文化を払拭し、何かしらの症状があれば、休ませるような企業風土の構築も呼びかけていって欲しい。
- この感染症がいつ収まるかわからないが、例えば2週間なら2週間と期限を示さないと、会社をずっと休めなんていうことになれば、社会生活が成り立たない。今が本当に大事な時期だというメッセージを出すべき。
- どれくらいの期間が適切かということは、海外の流行に依存する。今の流行予測を見ていると4月まで流行が続くと思われるので、封じ込める気であれば、「この対策は一定期間行う」と覚悟する必要がある。
- 今回のウイルスについては、新型インフルエンザと異なり、ドライブインフォースが大人である。職場の集会や飲み会等を注意すべきで、つまりはソーシャルギャザリングを抑制することが非常に重要である。
- ソーシャルギャザリングを自粛してもらっても、一度そのメッセージを出すと、日本の悪い癖でやめるタイミングを見失ってしまう。感染症の拡大と重症度を勘案して、なるべく早期に見直すとか、定期的に見直す必要がある。
- 一方で、見直しのためには、感染の状態やウイルスの危険性について、観察する時間は必要になってくる。
- 自粛等の適当な期間については、感染の広がりや重症度を勘案して早期に見直していくべきである。

<クルーズ船内の患者について>

- クルーズ船における感染者の発生は2月15日以降、ほとんどなくなっている。これは、ほとんどの感染者は2月5日以前に感染していることを示す。ただ、残念ながらクルーの感染は少し増えてしまっているという事実がある。
- 感染源の人が発病してから二次感染者が発病するまでの期間が大体4日少々かかると推定している。
- クルーズ船におけるクルーの感染対策については、手洗い、消毒、食事の際に距離を開けるなどは様々な指導により改善が見られていた。

- PCR 検査を行った上で陰性の方については下船をして自宅へ戻っていただいているが、2週間程度は発症する可能性が否定できないということで、その間は自宅でなるべく経過を見ていただくというのが良いのではないかと。
- 船内においては、診療などで曝露した、または感染した可能性のある者が通る動線と、そうでない者が通る動線が明確に分けられていた。検体採取の際は、全身の防護具を着た上で感染リスクを下げるためなるべく距離をとるようにしていた。
- クルーズ船におけるオペレーションは検疫の過程であり、船はアメリカ国籍、船長はイギリス人と様々な主体が絡んでいる。WHO などとは相談したが、現行、国際法上、明確な定めがないという大きな問題がある。
- クルーズ船内で発症した方が入国した際には、国内の患者数とは区別するため、そのほか（others）としてカウントしている。
- 報道では、下船に向けて陽性者の数が増えていくかのように報じられているが、陽性患者が確認できた時点と感染が実際に起きた時点とは全く別であることも発信した方がよい。

<加藤厚労大臣ご挨拶>

- 本当に皆さんのお力を頂きまして一つひとつ先に進んでいるという実感を持たせていただいております。いずれにしても、この感染、もちろん、新型インフルエンザのときの経験はありますけれども、また今回の新型コロナウイルス、別物であります。違う特徴もいろいろ指摘をされているところであります。

また、日々、新たな事実が分かってくるということもあろうかと思えます。また、国立感染症研究所を中心にいろいろなデータを分析し、また、各先生方のお力も頂いております。まさにこうしたものを結集しながら、このコロナウイルスの拡大防止、また、それを乗り越えていく、それに向けて我々も全力で取り組んでいきたいと思っておりますので、引き続きの先生方の御協力をお願いしたいと思います。

また、本当に瞬時瞬時に動きますので、先生方には別途、朝から、夜から、電話をさせていただいて、またアドバイスを伺うこともあると思っておりますので、ひとつよろしく願いをいたします。

今日は本当にありがとうございました。

以 上